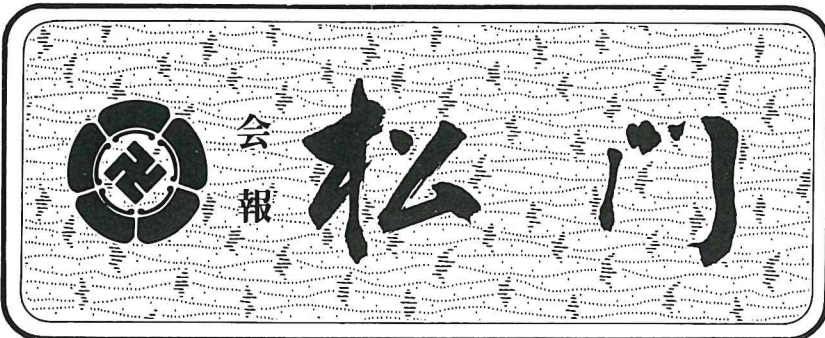


- ・松陰 敬仰の 氣運 醸成
- ・松陰 精神の 継承 普及
- ・松陰 教学の 研究 振興

○編集発行 財団法人松風会  
〒753 山口市大手町2-18  
山口県教育会館内 TEL 0839 221218



# 吉田松陰の「狂」



元指月中学校長  
松陰研究者  
松田 輝夫

「実に人間吉田松陰の秘密を解く鍵は、『狂』にあるのである。松陰の人間学的研究の焦点は、『狂』の本質の究明そのものである。」

「狂」の用語を自称他称に用いて呼ばれる松陰の「狂」の本質は何であろうか。

これは、京都大学名誉教授下程勇吉著「吉田松陰の人間学的研究」に言明されている。少なくとも松陰の全体像を知るためには、「狂」を視点とした考察は欠かせない内容と考える。そこで、素朴な気付きを二・三述べてみることにする。

安政六年小田村氏への詩には「吾れ世に容れられずと雖も、要するに自ら狂狷の徒なり」と述べている。孔子は「論語」に、期待する人間を聖賢(中道の士)・狂・狷(狷)・郷原(郷原)の四段階に類型化している。「孟子」尽心下第三十七章に詳しい。松陰は「講孟余話」にその解説をし、松陰自身狂狷たらんことを表明している。

は嘉永元年松陰十九歳(数え年)に始まり、安政六年五月東送前まで見られる。その間「狂」についての用語は二十五種類余もある。なお、「狂」の頻度は松陰の精神の高揚した用猛行為と強く呼応しているようである。用猛第三回下田踏海失敗後、特に用猛第四回老中間部要撃後より野山獄再入獄東送までの頻度は目立って高い。このように

「抑々余大罪の餘、永く世の棄物となる。然れども此の道を負荷して天下後世に伝へんと欲するに至りては、敢へて辞せざる所なり。是の時に当りて中道の士の邊(そば)かに得べからざるは古今一なり。故に此の道を興すには、狂者に非ざれば興すこと能はず。此の道を守るには、狂者に非ざれば守ること能はず。則ち其の狂狷を渴望すること、亦

豈に孔孟と異らんや。」と。更に、松陰は兵学者としての見解を加えている。

「余亦常に謂ふ、兵家の貴ぶ所は戦陣の魁殿にあり。魁は先駆なり。殿は後殿なり。……先駆は狂者の事なり。後殿は狂者の事なり。人生七十古来稀なり。今吾が輩已に其の二三を失ふ。余るもの日に減ず。已に先駆を俾り又後殿を譲らば、尸上(死後)の恥辱、勃海(大海)を傾けて是れを濯ふとも、五百歳千歳を経て減することなし。如何如何。」と。

なお、松陰は「常情を以て論ずれば」中道の次に郷原をあげ、狂者は最下位に見なされるといふ。孔子が「徳の賊」といった郷原は「人に益ありて世に害なき者」と高く認め、狂者は「礼法を乱り政務を害する者」として、世俗の人はいと憎むといふ。孔孟の道をめざすことの有無は問題にしない世情の実態を見抜きながら、松陰は「狂者」を自任しているのである。

松陰は、孔孟の教えを基盤に十分な検討の上、「狂者」への志を確立し、兵学者を自負しつつ力強い歩みを展開している。「狂者」としての実践は誠の一

字を貫き、積誠これ努め、幾多の困難に身をていして取組み、厳しい「狂者」の歩みを貫いた。

最後に、この道(孔孟の教え)を興すために「狂」を自任した松陰のこの道は、「学は、人たる所以を学ぶなり」を基盤に、日本の現状を見据えてとらえている。「人の最も重しとするは君臣の義、国の最も大なりとするは華夷の辨」と把握し、当面の課題を「尊王攘夷」と焦点づけている。日本人として国難を救うために「狂者」を自任し、貫き通した松陰の「狂」の心棒を一口でいえば「かくればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂」の「大和魂」にほかならないと考えられよう。

## 第2回「松陰研修塾」



平成6年6月11日 於山口県教育会館

## 松陰精神の源流

## 中朝事実



山陽女学園  
講師 藤田 覚

吉田松陰が継いだ吉田家は、代々山鹿素行が開いた山鹿流兵学の師範として毛利氏に仕えた。素行（一六二二—一八六）は会津で生まれたが、医を業とした父について江戸へ出て育った。六歳より詩文を作って「堂上の貴神」とまで評判であった。七歳より両部神道の淵源を探ると共に、老荘学より禅に進み、直指人心の真訣にまで迫り、神儒道仏に通ぜざるはなかった。

素行には中朝事実、武教小学、武教全書、聖教要録、山鹿語類等々、膨大な著がある。松陰が十一歳の時講義して藩主をしていたく感動させ、以後二十二歳まで毎年一回講義に用いた武教全書を初め多くは兵法書である。しかしそれらは方法論で、松陰生涯の生き方の方法を導いたものではないが、松陰の根底に在って、彼の精神の中に強力な人間愛、民族愛の心情を培ったものは、素行の精神的純粋さと知的鋭敏さを以て人間の根源、

し。」という。

空気の中にいて空気の存在価値を知らない如く、大海や大平原にも比すべきわが国の広大無比の文明の中に私は生きていないがその美を知っていない。専らシナ（差別用語ではない国際的呼称である）の経典（経は聖人の著書を言う。孔子の著）に親しみ、シナの人物を慕っている。主体性を失った恥かしいことである。放心とは孟子が「鶏が逃げたと追いかける前に、お前の主本の本心が放たれているのをとりもどせ。」と言った話に基づく。

日本の自然は他国に比すべくもなく、人はすぐれ、古代からの神は広大な愛をもち、皇室の政治は綿々と続いて輝やかしい文化を醸成している。

今ここに、この輝やかしい「中朝」の伝統的、歴史的「事実」を述べるので児童に読ませ忘れないようにほしい、というにある。ここに言う「中朝」「中華文明」とは、「日本」「日本文明」のことである。「神明」とは「神」であるが、後記の如く素行、松陰とともに中江藤樹（一六〇八—四八）の神々同様、世間的宗教的「神」概念の神ではない。

現代の如く日本の経済的發展

という具体的姿を見ることができた時代であれば、この背景と二千年来の世界に例のない政治上の安定と、その上にこそ生まれた日本文化を、このように讃えたとしても特異なことではなく、内外に認められる事であるが、当時の上下こそってシナ文化に蕩酔し、シナ人尊崇の風土の中に在って、これ程の卓見をなすとは並ならぬ眼識、その確信勇気を要することであった。

丁度この頃（十七世紀中葉）藤樹の弟子熊沢蕃山が「もし禁裏がなかったなら日本文化はなかったであろう。（集義外書）としているが、素行ほどの追及はしていない。またシナの歴史、唐史には「倭国は礼儀の国」と讃え、孝経古文もシナで亡失して二回逆輸入しているが、こうした史実の恐らく広く知られなかった時代であると思うが。

この確信は単なる知的観念的口頭的なものではない。前記の如く四教に通じ、特に「新儒学」と言われた宋代儒学、その代表たる朱子学をも窮めている上に多くの門弟をも抱え、名声も天下に達した責任ある立場に在る

者としての論述である。

本文の冒頭に「天の先ず成りて、地後に定まる。然して神明その中に生まれ、国常（とこ）立の尊ともうす。一書に天の御中主の尊ともうす。謹みて按ずるに天は気也。故に軽く揚る。地は形也。故に重く凝る。人は二氣の精神也。故にその中に位す。」という。

「両部神道に従って、日本書記の国常立尊を以て日本の開祖とする。これを支える宇宙の根源構成要素を「気」として、気の軽いものは揚って天となり、重いものは下って固って万物の形をなして地上に在り、人間は天と地の中間に在るものとする。

この説は宋代初期の張載、（一〇二〇—七七）が「正蒙」に言う所である。「気」は古代老荘を始め孟子の言う所で、丁度古代ギリシヤに於てヘラクレスが「万物は火でできている。」「万物流転。」としたものと似た発想である。しかしこれは単に物質界の構成元素を言ったものであるが、「気」は物質界だけでなく精神界の構成変化も含まれる概念である。現在日本語の「気」が広く各様の意に用いられる所である。

シナ宋代に於て漢代以後沈滞していた儒学が復興し隆盛となった。その先達となったのが張載（横渠と称された）と、周濂溪であった。横渠は古代荘子の「太虚」（形而上の宇宙）その構成要素の「気」及び、「斎同」（万人はみな同じ生まれであり、同じ情をもっている）ものであるとする説を総合して「広大なる万人愛」の思想を構成した。宋学をまとめ、儒学を科挙（官吏登用試験）の試験科目として定着させた朱熹は主として濂溪を受け「理」学としたが、横渠の「正蒙」の中の「西銘」にはいたく感銘賞揚している。

その西銘冒頭に「乾を父と称し坤を母と称し、予ここに藐焉（生まれれて形を成している）：孤弱を慈くしみ、疾病者をおわれみ、無告者（訴えることもできない者）を助けよ」人間は元来同じ根源から生まれ、「気」を同じくする「広大」なる心の持ち主であるはずだと説くのである。素行は横渠に共鳴して「天地創成」「民族愛」理論の根拠とし、日本書記の内容を材料として「中朝事実」を構成しているものである。

続けて「天地人の成るや未だかつて先後なくんばんあらず。氣これをいざない、形之に和し、神これを制すればなり。けだし草味屯蒙の間、聖神その中に立ちて、悠久にして変せず。これその神を国常・天中と号するゆえんなり。それ天道はやむことなくして高明なり。地道は久遠にして厚博なり。人道は恒久にして極りなきなり」と、混沌とした宇宙の始めより氣在って形を成し、神がこれを統制して悠久なるこの国ができ、天地人と成り、神の意志を体して天道・地道・人道があるという。

古代易にいう混沌の中に在る乾坤の思想に依るもので、太安麻呂も古事記序文に「混元凝りて気象未だ頭れず。乾坤分れて造化の首め」という。紀・記・藤樹・素行の如く日本の風土・人間を愛する者にとつて、天地自然は無視できない生きる上での関係重大存在である。藤樹・素行は同じく易理に依る所の張載に借る所が大きいが、シナ儒者が根源の乾坤或は太極から直ちに人間に及ぶのに対して両者は中間の存在天地を大切にする。天地人三才の生まれ方は氣の凝縮によって現象界に形を成すものであるが故に、どうしても

先後の差はある。古事記にも日本国土成生を順次記す所。しかし神はこれら全体を統制するものであるが故に先後はない。すなわち国常立の尊は藤樹が太虚神の名で表わした神と同じもので、世間一般という神秘的にして人間知の及ばない神ではない。一神であるがキリスト教の一神の如く一神二神と対立するもの存在を想定した一神でなく、万物を創造するが万物の外に在って統制するものでなく、万物の根源そのものであって、また万物となり、個の中に主本（本体）となつて在り、全体の中にもある。神妙であるが扉の向うに在る神秘な存在でなく、実在である。従つてこの神は近世的合理的哲学的存在である。さらに人々の平安を思つて「本朝の地形は東に長くして南に短かく、西上東下みな豊大なり。良位を背にして離明に向う。蜻蛉（とんぼ。あきつ島）にかたどれり。洋海四方を廻し外域の船襲来の畏れなし。品物備えざるといふことなし。」「先聖の成烈を篤うして億民の止る所を安くせんと欲し。」「父の道を継ぎて孝となし、凡そ人を思うときは、なおその木を愛す。そのその人を愛すときはなおその鳥に及ぶ。」という。易にいう良（ごん。止まる）は藤樹も好んで度々使う所である。また古今東西、哲学者思想家の最後に求める所である。易に「その背（真実の在る所。本体）に良まりてその身（欲身）を獲す。その庭（世間、人との交際の場）に行きてその人（人の悪い所）を見ず。答（とが、罰）なし。」とするものに依る。藤樹が経解に「背は中和不倚不易の象。不見未発の所。」「専ら中和に在り。」「天性の靈明。良背適応。応事接物、意必固我なく。所謂中和に到り、天地位し、万物育する者」といい翁問答に「この心を知れば道ずれの人に對してもはらから（兄弟）の思いになる、万人を人として愛せずにはいられなくなる。」とされている。万人愛の根源の認識を養う所である。「離明」も易に「離は麗（り）つき、草木が地につくように、人として真実についていれば、人として人格は明るく、自他ともに嬉しい人生を送ることができ、とするものである。素行はこうした古来の名言を用いて、美わしく豊かにして、すべての人間生活に必要なものは備つており、海に囲まれて平安であつて、政治は安定し輝かしい風土文化の中に在る日本人である。親に孝という基本倫理から博く人を思う普遍的愛に生きようとすれば根源真理の愛の木に止まるもので、この愛はすべての生き者にも及ぶことができると根源生命に連る真実に根ざした広大なる愛に生きるべきことを説いているのである。少年時代より膨大な書を読みその内容を鋭敏にわが物としてこれを藩主を始め苦者に講義して魅力のあつた学者的松陰が「神州」とか「神国」等の宗教的表現を用いているのは、一見奇怪にみえるが、この「神」とは、素行の「神」と同じく、時間的空間的広大なる日本民族の全存在、その総合であり、その抽象名詞であつて、世間一般の神秘的概念の神ではない。この愛すべき「中朝」の「神」を守り、その発展を渾心、わが身の任務として、生涯のすべてをここに注いで生きた松陰の精神構成を、ここに導いた中朝事実の力の偉大さに心打たれるものである。

## 吉田松陰と李卓吾



「諫死」から「道死」への道のり

山口鴻峰松陰読書会

会長 原

祥文(選)

(選者のことば)

会誌「涵育董陶」(本年で第十二集まで発刊)の中から話題性のある論稿を選んで、ここに紹介する。

松陰の「死計」とは——この  
日、この空、この私——

人生で一番難しいことは「死  
計」(どんな思いで死を迎えれ  
ばよいか、死ぬ時に自分の人生

をどのように総括し、納得でき  
るようにするか、そのことを問  
うこと)であると言う。

松陰は、いかに平素から武士  
としての心得があったとは言え、  
あのように泰然とした態度で死  
に赴くことができたのだろうか。

ここでは、松陰の死計の形成  
というものを明儒 李卓吾との  
あいをもとに考察してみたい。  
城山三郎氏は作家生活の前半  
において「男ひとり炎の中の道  
一筋に」と唯ひたすら自分の立  
場を守って作品に賭けてきたが、  
ある時期から「一日即一生」と  
いう心境になり、今では自分で  
つくっていた殻(守備範囲)を

ときめた。死を求めもせず、死  
を辞しもせず、獄に在っては獄  
で出来る事をする、獄を出ては  
出て出来ることをする。……」  
とか、「……時は言はず、勢は言  
はず、出来る事をして行当たれ  
ば、又獄になりと、首の座にな  
り行く所に行く」という穏や  
かな心境に達している。

この松陰の心境の変化と城山  
三郎氏の人生に対する構えをダ  
ブらせて見る時、偶然にもその  
心境がよく類似しているなど感  
じ入るものである。

松陰はなぜこのような心境の  
変化をもたらしたのか。本質的  
には松陰とはまるで違うのに、  
心情的、全人格的に惹かれ、そ  
の精神的な支えとなった李卓吾  
と当時(安政六年、野山獄入獄  
——江戸送り——伝馬牢——処  
刑)の社会情勢とをからめなが  
ら、心境が変化して行った理由  
をさぐってみたい。

李卓吾とのあいと傾倒——  
唯だ僕の心事と符合——  
李卓吾という人物の名前は日  
本ではあまり知られていない。  
ましてや松陰とどのような係わ  
りがあったかというような事に  
ついては、ほとんど知られてい  
ないのではないかと思う。

李卓吾、名は贊、卓吾は号、  
別号を温陵と言ひ、明王朝末期  
の人物である。(明時代の有名  
な思想家としては王陽明がいる)  
彼は明朝も末期の万曆三〇年  
(一六〇二年)、「乱道惑世」  
の思想犯として投獄され、その  
獄中で自刎して果てている。時  
に七六歳であった。

この李卓吾と松陰のであひは  
彼の主著である「焚書」(読む  
者が怪慥を生じるので、読んで  
ら焚き棄てる書物)、「続蔵書」  
(「蔵書」と同じく、人に見せ  
るものではなく、仕舞っておく  
べき書物という意味)を獄中で  
読んでからである。書物を通し  
てのことではあるが、これも一  
つのであひと考えてよい。

松陰が「焚書」に接したのは  
安政六年(一八五九年)正月、  
二度目で最後となった野山獄へ  
の入獄後しばらくたった頃であ  
る。この最後の獄中、松陰は詩  
友土屋蕭海から差入れてもらっ  
た「焚書」や「続蔵書」のいく  
編かを読み、例の如くこまめに  
抄写している。実によく抄写し  
眉批を書き記している。  
ちなみに、眉批というのは、  
自分が読んだ書物の本文の上部

欄外に、その本文に対する自分  
の見解や急所と見なすところを  
短く書き記したものである。こ  
ろ。そして、抄写した文章やそ  
の短評等を多くの門人達に書き  
送っている。

「李氏蔵書を抄した。卓吾の  
論大抵洩らさず。誰れか一読し  
てわれと同じく案を拍つてくれ  
るものはあるまいか。又李氏焚  
書の抄は誰れの手にあるか。鴻  
鶴志(松陰の抄録した古人の言  
行美事録)も終った。誰れか見  
るものあれば見せよう。なくば、  
二書とも杉の大人(杉百合助の  
こと)へ見せて呉れよ。」と、大  
変な惚れ込みようである。又、  
「……故に余泣いて之れ(焚書)  
を抄す」や「……唯だ僕の心事  
と符合……」と言うように松陰  
は卓吾の中にのめり込み、卓吾  
と共感し、一体感を持ったにち  
がいない。

李卓吾との結合点——卓吾は  
蠢物、景仰欽慕大方ならず——  
松陰は何故これほどまでに李  
卓吾にのめりこみ、傾倒してい  
ったのか、何が「僕の心事と符  
合」するのであろうか。  
松陰は高杉晋作に当てた手紙  
の中で次のように述べている。  
「僕頃る李氏焚書を抄録仕り

候。卓吾は蠢物にて、僕景仰欽慕大方ならず」

松陰は人間卓吾を蠢物と言っている。蠢というのは身の程もわきまえず、事理の分別もないことであり、狂悖・狂狷と同義語と考えてよい。狂は積極果敢な行動力、狷は性質堅忍の人のことであるが、松陰も卓吾も特に「狂」即ち「野」の心事において符合するのである。

絶えず孤独な闘いを続ける本人たちの心情は、周りを正常とするならば異常であり、狂気であり、周りから疎外され、異端視され、敬遠される。また、狂気をあえて改めない一本道ぶり

は、まさに蠢物と呼ぶにふさわしい。松陰はおそらく卓吾を蠢物と呼んだ時、痛いほどの一体感を胸の内にもったに違いない。松陰が品川弥二郎に出した書翰に「余り李卓吾に似て自らも恥候へども、是れ吾が真骨頂なり」と言っていることから十分うかがえる。

諫死の勧め——皆に先駆けて死んで見せる——

安政六年正月前後、松陰は孤立無援の中にあり、せっぱ詰った心的状況にあった。それは入獄の理由となった老中間部詮勝

の要撃策を高杉晋作、久坂玄瑞ら松下村塾の高弟たちから「義旗一挙、実に容易ならざる事に却って社稷（藩のこと）の害を生じ候事必然に御座候」とこの計画の無謀さを説き、「胸を

押え鋒を斂める」ように連名で血判状を送り、自重を求めたからである。ところが、松陰は入獄後も新たに伏見要撃策を画策して、自分のみならず、入江杉蔵、野村和作兄弟をも獄につな

がれるという羽目になった。この頃、高杉ら高弟たちの日和見主義（松陰がそう思っているのであって、時局の認識は弟子たちの方が妥当であろう。松陰は政治感覚が鈍い所がある）

に対して、「吾輩、皆に先駆けて死んで見せたら、観感して起るものあらん、夫れがなき程では何方時を待ちたりとて時はこぬなり。……忠義と申すものは鬼の留守の間に茶にして呑むよなものでなし。……江戸居の諸友久坂・中谷・高杉なども皆僕と所見違ふなり。その分れる所は僕は忠義をなす積り、諸友は功業をなす積り……」とはげしく攻撃し、絶望に似た憤怒の中で誰れよりも信頼していた塾生たちに絶縁を宣言するのであ

る。自己の死によって人々を動かす、あるいは藩の幹部や藩主までも動かすことで、局面を開いていこうというのが松陰の「諫死」の論理である。

そうした時、タイミングよく卓吾の著書にであい、「僕の心事と符合」し、共感し、全人格的に傾倒していったのである。心境の変化——死は人情の甚だ悪む所——

死に向けて一直線に早つた松陰の心境に変化が見え始めたのは安政六年五月頃からである。あて先不詳の書翰に次のような文がある。

「死を請ふの一事、僕素より固執す。而して今最も深く之を悔ゆ。何ぞや。凡そ事、人情に原づかずんば、何を以て成るあらん。死は人情の甚だ悪む所、……自今、僕復た死を請はざるなり。斯の道至大、何ぞ独り一死して後樂しと為さんや。……死ぬことしか求めなかつた自分とは間違っていたと反省し、事は人情に背いては成就しない。死は人情のにくむ所である。これからは諸友に死なせてくれと強要しない。この道は至大（天道とも人道ともとることができ

あり、死だけがこの道につく唯一の方法とは言えない。一人よがり死を願うだけでよいものかと諸友に謝罪するのである。

このほか、こんな言葉も見えらる。「此の道至大 餓死・諫死・縊死・誅死、皆妙。却ぞきて一生を偷むも亦妙、一死実に難し、然れども生を偷むの更に難きに如かざる事。初めて悟れり。」

正月から三月頃までの心境と比べるとおよそ一八〇度に近い変化が生じている。

道死への高まり——道尽き、心安んず、便ち是れ死所——松陰は安政六年七月中旬頃、高杉晋作に当てて次のような書翰を送っている。「貴問に曰く『丈夫の死すべき所いかん』と。僕、去冬已來死の一字大いに發明あり。李氏焚書の功多し。……約して云はば、『死は好むべきに非ず、亦悪むべきに非ず、道尽き心安んず、便ち是れ死所』『世に身生きて心死す者あり、身亡びて魂存する者あり。心死すれば生くるも益なきなり。魂存すれば亡ぶるも損なきなり』と。……死して不朽の見込みあらばいつても死ぬべし。生きて大業の見込みあらばいつでも生きてくべし。僕

が所見にては生死は度外に措きて唯言ふべきを言ふのみ」

松陰は李卓吾の「死の一字」（死計）の要約として、死は好むべきものではないし、また、にくむべきでもない。道を尽し心が安然と澄んだ時が死所であると言ひ、また、魂が生き続ければ身は亡ぶとも不足はないと言っている。この一文には、肉体の生死を超えて、明鏡止水の心境ともいふべき松陰の安らぎが感じられる。

○ 松陰は「焚書」の登場人物の中で、このほか何心隠（卓吾と同時代の人で、陽明学派の一権威、武昌で獄死）に好意を寄せている。それは、彼が「道死」の実践者であったからである。

即ち、「焚書」△何心隠編▽によって名という有限の価値ではなく、道という無限の価値について死ぬ時、人はすでに死を超えており、その死がかえって永遠の生となる「道死」論へ高まったのである。

このように松陰が「死の一字大いに發明」できたのは、獄中において李卓吾とののであいがあったからこそである。正に「焚書の功多し」と言えよう。

# 第2回 松陰研修塾 (平成6年度～8年度) 3カ年在塾研修

## 主題 人間吉田松陰に学ぶ

### 一 趣 旨

吉田松陰の生涯は、至誠留魂の気迫とその実践に貫かれたものであり、松陰は今なお不滅の光を放ち本県の誇る偉大な歴史的逸材である。

松陰の生き方は、時代を越えて常に課題解決の指針を示唆し、くめども尽きない深奥な人間像とともに、限りない探究が今日望まれている。

現代社会に生きる人間を取巻く環境の急激な変化に伴い、主体としての在り方があらためて問われている時、松陰の精神的遺産に学び自らの資質向上に努めることは極めて重要である。

よってここに、「第2回松陰研修塾」を開設する。

### 二 主 催

財団法人松風会  
山口県小学校長会  
山口県中学校長会

### 後 援

山口県高等学校長協会  
財団法人山口県教育会  
山口県教育委員会  
山口市教育委員会  
萩市教育委員会

### 三 研 修 課 程

#### (一) 第一年度 (平成六年度)

ア 第一回 平成六年六月十一日(土)

十時～十六時三〇分

会場 山口県教育会館 五階 第二研修室

開塾式・記念撮影

講 義 松陰先生の生涯

前山口県立山口博物館長・松風会理事  
石原啓司先生

座談会 松陰研修塾に求めるもの

山口女子大名誉教授・松風会理事  
河村太市先生

講 義 今あらためて松陰に学ぶもの

松陰研究家・松風会理事  
三輪稔夫先生

オリエンテーション

イ 第二回 平成六年八月十二日(金)

十三日(土) 十時開講

会場 萩青年の家(一泊二日研修)

入所式

講 義 志を育てる教育

河村太市先生

講 義 兵学者としての松陰

元萩市助役・松陰研究家  
井町新熊先生

巡 検 塾生の自主企画による松陰遺跡の研究

座談会 巡検内容の整理と今後への展望

講 義 旅と松陰 三輪稔夫先生

講 義 松陰と登波

元指月中学校長・松陰研究家  
松田輝夫先生

講 話 教えることのできない  
教えたことがある

―私が松陰先生から学んだこと―

松陰研修塾第一回生むつみ中学校長  
和田征文先生

#### ウ

オリエンテーション・退所式

第三回 平成七年一月十四日(土) 十時開講

会場 山口県教育会館 五階 第二研修室

講 義 杉家の家風 三輪稔夫先生

講 義 松陰の敬仰した歴史的人物  
河村太市先生

座談会 問題事項や疑問点を話し合う

オリエンテーション

(二) 第二年度 (平成八年度)

第一年度研修を基礎に年間三回研修・修了式

(三) 第三年度 (平成八年度)

第一・二年度研修を基礎に年間三回研修・修了式

第二回松陰研修塾入塾生(四〇名)

小学校 二〇名 高等学校 四名男 三六名

中学校 十三名 一般 三名(女 四名)

松陰研究基本図書

脚注 吉田松陰撰集

―人間松陰の生と死―

平成七年度刊行予定

約七五〇頁 貼付けケース付き

編集 財団法人松風会

# 研修風景



▲研修中の塾生(6/11)



▲開塾の辞・松永理事長(6/11)

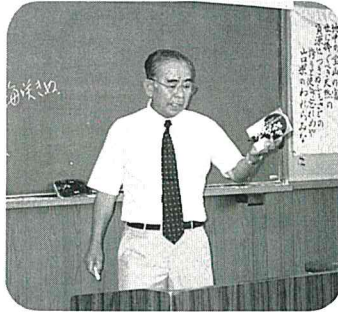
# 松陰に学ぶ



◀石原啓司先生(6/11)



◀井町新熊先生(8/12)



◀河村太市先生(8/12)



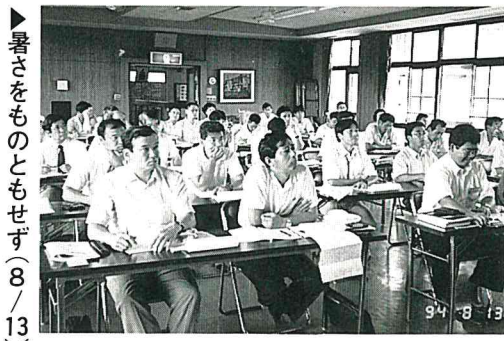
▲第1回生(和田征文氏)の講話(8/13)



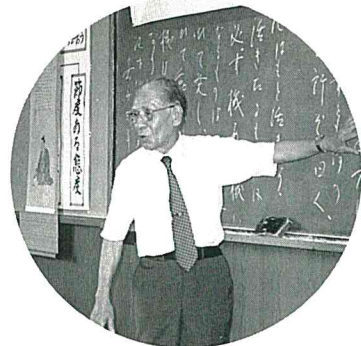
◀松田輝夫先生(8/13)



▲巡検前の自転車点検(8/12)



▶暑さをものともせず(8/13)



◀三輪稔夫先生(8/13)

# 松下村塾友の会

会長 日高孝市

事務局 〒七九九一三三

愛媛県東予市三津屋東九一六

松本マンション一〇二号

☎〇八九八―六四―一五〇五

会員 年齢二〇代―四〇代

現在 一八名

会費 年一〇〇〇円

会報『草莽』年四回発行

現在一四号(八・二〇発行)  
発足 平成二年一〇月



日高孝市氏

松下村塾友の会は、松下村塾  
に關係する吉田松陰・高杉晋作  
・久坂玄瑞等について研究し、  
松下村塾を中心に、幕末の長州  
明治維新をみてゆきます。  
毎年 春に山口県で史跡巡り  
秋は京都でテーマをきめ  
て会合を開く

入会を希望される方(二〇代―  
四〇代)は、事務局までご連絡  
下さい。(代表 日高孝市)

松陰研究の組織を紹介します  
ので、松風会へ御連絡下さい。

## 国づくりは人づくり

旧ソ連邦市場経済指導者松下村塾に学ぶ

- 第一回 平成四年一月七日
- 第二回 平成五年五月二一日
- 第三回 平成五年一月二六日
- 第四回 平成六年五月二〇日

- ・キルギスタン 三名
- ・ラトビア 三名
- ・ウクライナ 一名
- ・モルドバ 一名

(二五歳〜四八歳)

松風会理事 三輪稔夫先生

主催者 イスカラ・ビジネス

通訳 コマロフ氏

参加国別延人数

・ロシア 二四名

・カザフスタン 一〇名



松下村塾前にて

主催者からの手紙の一節より  
研修生は、三輪先生の懇切な



松陰先生の墓前にて

御説明により、明治維新の先覚  
者吉田松陰先生の人となり、学  
問と後継者育成に対する情熱、  
身をもって示した愛国の信念な  
どを学ぶことができた大変感  
動し、帰国いたしました。先生  
に是非感謝の気持ちを伝えてほ  
しいとの事でございます。:  
若い経営指導者たちが、松陰先  
生の気持ちを学びとり、まず自  
分の企業で実践し、企業の社会  
的責任を自覚し、経済活動を通  
して新しい国づくりに努力する  
ことを願っています。

(文責 編集子)

## 図書と紹介

至誠の権化

吉田松陰の生涯と教学

著者 折本章  
頁数 三三六

まえがき

第一章 幼年勉学時代

一 時代背景

二 生誕の丘と松柏

三 父母の養育態度と家風

第二章 兵学修行時代

一 先師山鹿素行とその感化

二 郷里における諸師範

第三章 諸国遊歴時代

一 九州遊歴

二 江戸遊学

三 亡命東北遊歴

四 屏居待罪

五 諸国遊歴

六 江戸再遊とペリー来航

七 海外渡航への志

## (財)松風会は、あなたの松陰研究室

一 研究相談

お気軽にどうぞ

いつでも・何でも

二 図書・資料の貸出し

但し、目下県内、直接来会

三 研修事業の実施

松陰研究について、基礎的・  
専門的・体系的に留意の上、研  
修事業(松陰研修塾・松陰教学  
研究会)を推進しています。

研究を推進しています。

第四章 教育的活躍時代

一 野山獄内外の温情

二 野山獄における思索と教育

三 杉家幽囚

四 松下村塾の理念と教育

五 松下村塾の政治的実践

運動

六 野山再獄と策謀対立

第五章 天地対決時代

一 東送とその準備

二 至誠の修行

三 不滅の魂と没後の時局

おわりに

定価 一冊 一二〇〇円

送料 実費

申込先 〒740

岩国市門前町

〒〇八二七―三二―六一四七

又は、〒745-11 徳山市戸田三〇

桜田中学校内 折本 章宛

☎〇八三四―八三―二〇〇七